2022.07.01

霊長研解体５

小嶋祥三

岩波の『科学』の、松沢による「野生動物研究センター発足」という文章を読んだ。そこには、尾池総長の問いかけとともに、当時、理学研究科の教授だった山極前総長が、同志としてセンターの設立に関わったことが書かれていた。わたしはすでに霊長研を去っていたので、このセンターの設立の経緯を知らなかった。尾池－松沢－山極（まだ他にもいるだろう）が中心になって、つまり、犬山でなく京都が中心になって、設立したと考えてよいようだ。わたしは霊長研のフィールドの研究者が、ほとんど見返りもなく、「野外施設」を差し出した理由が分からなかった。このような計画に良くマア賛成したな、と思っていた。フィールドの研究者で、霊長研からセンターに移ったのは杉浦秀樹だけだったのだ。彼は京大ではなく東大出身で、東大時代の正高信男の影響を受けており、心理色が強かった。また、屋久島で活動していたのが移籍の理由だろうか。

松沢の文章を読んで思ったのは、霊長類研究所のフィールド研究の弱体化だった。わたしが在職していた時、昔ほどの勢いはなかったが、それでも存在感はあった。松沢は霊長研のフィールド研究を「縮小再生産」と批判していた。所長になり、所内「改革」を推し進めていた松沢の意向に、霊長研のフィールド研究者は従わざるを得なかったのではないだろうか。多くの所員は松沢の態度に逆らえなかったのかもしれない。これは、今回の研究費の不正使用に意見を述べるものがいなかったことや、松沢らのチンパンジーのじゃんけんの酷い論文を批判する研究者がいなかったことと符合する。わたしが在職していた当時は、所員はこのようなボス的な研究者の存在に批判的だったが、変わってしまったのだろう（圧迫される「玄関前のクスノキ」）。山極がセンター設置に積極的だったことは、フィールド研究者がこの計画に賛成する要因の一つだったかもしれないと思った。

今回の処分について、わたしは霊長研の心理系の部門と野生動物研究センターをその対象にすべきと思っていた。研究費の不正が行われたのが、この２つの組織だから。松沢や山極の立場なら、霊長研とセンターのいずれを残したいと思うかを考えてみた。松沢も山極も霊長研に在籍したが、既に離れている。センターは尾池氏と松沢、山極でつくったものだ。尾池元総長と山極前総長がつくった組織を潰すことは大学の体面からもできなかったかもしれない。山極は伊谷純一郎氏を尊敬しており、伊谷氏の息子の伊谷原一を野生動物研究センターの教授に迎え入れている。そんな点からも、センターを潰せなかっただろう。犬山には尾池理事長、伊谷原一所長（その前は松沢は所長だった）、山極博物館長の日本モンキーセンターもある。松沢、山極の中では霊長研の重要性は大きくなかったのかもしれない。

これまで、わたしは山極前総長に同情的だった。松沢のために迷惑を被ったと。そういう面はあったのかもしれない。しかし、野生動物センターの設立に協力し、これといった世界的な業績の無い松沢をノーベル賞やフィールズ賞の受賞者がいる高等研究院の特別教授にし、さらに、問題の多い松沢らのチンパンジーのじゃんけんの論文を含む研究に総長賞を授

与した（山極は類人猿の研究者である）。ここまでやると、松沢と山極は、単に同じ組織に所属しただけ、では済まされないだろう。山極は学術会議の例の人事について、政府から説明がないことを憤っていた。それは、松沢が引き起こし霊長研を解体に追い込んだ不祥事について、関係者であり、当時の最高責任者でもある山極前総長から、何の説明も受けていないわれわれの不満、憤りと同一のものだ。山極は総長退任の際、恒例の会見をコロナを理由に取りやめたそうだが、これでは、その理由が疑わしく思われても仕方ないではないか。